



## 「出会いと発見が生きがい」 -日本語ボランティアを始めて-



もりや さちこ  
守屋 祥子  
1936年(昭和11年)  
茨城県水戸市生まれ、  
江戸川在住。

### 還暦過ぎての手習い

江戸川区の外国人登録者数は、23区内で新宿区について2番目に多いそうです。働くために日本語が必要だから「日本語を習いたい」、そういう方がけっこういらっしゃるのよね。

私が「みずえにほんごサークル」に参加したのは、1999年(平成11年)の1月、62歳の時に区が東部フレンドホールで開いた日本語講座の受講がきっかけでした。子どもが巣立って時間ができたら好きなことをやってみたかったし、昔から文学が好きだったので、日本語っていうのを改めて考えてみようって思って参加したんです。出てみたら「日本語の教え方」の講座で、私の勘違いだったんです。でも、始めてみたらとても興味深く、日本語を教えるのも楽しそうだと思います。

講座の最後に「外国人に日本語を教えるグループを作ったらどうですか」と区の方からお話があり、受講者の有志で、その年の7月にサークルを立ち上げました。最初は年齢も考え方もバラバラの人たちが集まったので、教え方も人間関係も手探りで大変でした。だけど、考え方が自由で良い企画をしてくれるので、若い人たちに役員をお任せすることで運営が安定しました。あまり規制は作らず、できるときに来ればいいというグループなんです。メンバーは増えたり減ったりしていますが、常に20名位います。みんな仲が良くて楽しいですよ。

生徒は大人が中心ですが、子どもも通ってきます。言うことを聞かない手のかかる子どもがいると、「頼む」って言われて私のところに。テキストを使って日本語だけでレッスンするのが基本ですけど、飽きないように絵を書いたり、ジェスチャーやかるたをしたりと、いろいろ工夫しています。子どもは飲み込が早いけれど、無理やり詰め込んでやる気をなくさないよう気をつけてあげないとね。そんな子どもへの接し方は、幼稚園教諭の経験が役に立っているかも知れません。子ども相手は大変です。でもどんどん覚えてくれるので喜びは大きいですね。

今でも心に残るのは、あるインドの子どもに教えていた時のこと。「怪談むじな」という昔話を教材に紙芝居を作らせていたら、「おじいさんがだまされて怖いだけで

終わるのはかわいそう。だから、ハッピーエンドのお話にしたい」と言って、みんなが楽しそうに遊んでいる絵を加えたのです。なんてやさしい心でしょう。驚いて、親に家庭での様子を聞いたら、「『戦争をしている国も多いけれど、空からはミサイルではなく、花束が降ってくるような世界にしたいね』と子どもと話しています」って。この親子のことは忘れられません。日本語ボランティアを始めてから、そんな方たちとの出会いが楽しくて、あっという間に十数年が過ぎました。

### 子どもの頃に

私は、兄が1人、妹2人の4人兄弟の2番目で、1936年(昭和11年)に水戸市で生まれました。私の親は長野県の上田市の出身ですけれど、国家公務員だったので、何度も引越しをしました。父は繊維素材の研究者で、幼い私を研究室に連れて行ってシャーレや試験管を触らせてくれたり、海に行ってもこの貝はどうのこうのと説明してくれたりするような人でした。

その父が、鹿児島で肺結核で亡くなって、小学校入学前に祖母のいる故郷の上田市へ帰ったんです。父の実家は地主でしたけど、戦後の農地改革で土地のほとんどを失って、母が残された土地で農業をやりながら、一人で子どもたちを育ててくれました。私は、母と一緒に父の看病をしていて、結局移っていたみたいです。小学校に入った時に身体検査をして「肺をやられているから1年間、みんなと一緒にいてはダメです」と隔離されてしまいました。

あの頃はまだ入院施設も整っていなかったから、自宅の離れの蚕室(さんしつ)という蚕の卵を孵化(ふか)させる小屋にひとり生活していたのです。12畳がとても広く感じました。食事を運んでもらうときに母と話すだけで、兄妹とも移るからって離されて。

外で遊べないからしかたなく、ひとりで父が残した化学の本を見たり、文学の本を読んだりしていました。ゲーテとか漱石とか太宰とか、いろんなものを読みました。訳もわからず、なんかちょっと不思議だなんて思いながら読んでいたんですよ。「本を読んでも言葉の意味がわからない」と言うと、母は「わからなかったらこうやって

自分で調べなさい」と辞書の引き方を教えてくれました。

子どもですから、寂しかったですけどそんなことは言っていられなかったですね。どう過ごすのか、全てを自分ひとりで考えていかなければならなかったから。幸いなことに、2年生からは元気に学校に通えるようになり、高校まで上田で過ごしました。学校生活でも「自分で考えて自分で行動しなさい」と自立心を学びました。

## 働き続けて65歳に

当時はまだ半数以上が中卒で就職する時代。中学では、職業科という授業があって、夏休みに一週間くらい、本屋とか食べ物屋とか自分の好きなどころを選んで職業体験をしたんですよ。ご褒美程度の賃金をいただいて、職業ってどういふものかなっていろいろ考えましたし、母が早く相手を亡くし慣れない仕事で苦勞しているのを見ていたので、私も将来は仕事を持って働こうと思いました。



「みずえにほんごサークル」で日本語を教える守屋さん

それで、中学の時から理数系が好きだったので、将来は化学の研究がしたくて薬科大に行きたいと思ったんです。ところが、高校3年生の時、地元の幼稚園から奨学金を出すから短大の保育学部に行かないかと誘われて。親戚にも幼稚園教諭がいたし、音楽も好きだったので、就職や経済的な事も考えて、結局こちらの方が良い話かなと。それで、私はその奨学金と育英会の奨学金の両方もらって、1955年(昭和30年)に東京の短大に進学しました。

卒業後は、奨学金を出してくれた上田の幼稚園で5年間、その後、短大からのお誘いもあり東京に出て、私立の幼稚園で働きました。どこの幼稚園でも園長が自由にやらせてくださったので、そんなに高給じゃないけれど、働きがいついこうのはありました。

いくつかの私立の幼稚園を移りながら10年ほど勤めましたが、結婚して子どもができたので辞めました。当時はやはり子どもができると大変でしょう。長男の後に双子の女の子が生まれて、しばらくは子育てに専念しました。私の場合は、自分が幼児教育の道に進んだから、子どもが小さいうちは、どういふふうに育っていくのか成長過程をじっくり観察したいという思いもありました。

下の双子の娘たちが小学校に入って、もう勤めに出て大丈夫かなと思って、幼稚園や保育園の仕事に戻ろうと思って探したけれど、その頃は簡単には見つかりませんでした。職業安定所に行き「家事や子どものこともあるから自宅の近所で働きたい」という条件で紹介されたのが、縫製の仕事でした。その頃は江戸川区にも小さな縫製工場がたくさんあり、大勢の主婦がパートタイムで働いていたんですよ。小学生だった娘たちを近くの都営住宅の中にあった学童クラブに預けて仕事を始めました。

特に洋裁の経験があって選んだ仕事ではなかったけれど、工場を変わりながらも65歳で年金をもらうまで働きました。

## 自然のままに

江戸川区に引っ越してきたのは、結婚した1967年(昭和42年)です。最初は本一色に3年ほど、その後ずっと江戸川。その頃は静かなところで畑がありましたよ。今も江戸川区を歩くと公園がたくさんあって、子どもたちにとってもいい環境だと思っています。

今でも気晴らしにね、夜、誰もいない江戸川の土手に出て川に向かって歌っているんですよ。私は歌が好きで、3年前に亡くなったパートナーとも音楽サークルで知り合いました。私たち夫婦は、お互いを「パートナー」と呼び合っていました。「主人」では上下関係を感じるし、「女房」はまるで『源氏物語』に出てくる言葉みたいでしょう。

私は、最初の子ができてサークルを辞めましたが、彼はその後サークルだけではなく、身体が不自由な方々に歌を教えたり、車で送迎するボランティア活動もしていました。私が日本語ボランティアを始めてからは、外国人の生徒さんを花見に連れて行ってくれたこともありました。ボランティアも他の活動も生活の一部として自然にやっていましたね。

彼も早くに父親を亡くしていて、私と同じような環境があったんです。だから人に対する活動には、お互いに同じ価値観があったんじゃないかな。私が「日本語ボランティアで忙しい」と言って慌てて出て行ったりしても、文句を言わないで応援してくれていました。ボランティアも家庭で応援してくれないと、なかなかできないことですよ。

次は何をクラスの教材に使おうかなと考えたり、調べものをしに図書館に行ったり、なんだかんだと忙しい。でも、日本の文化や歴史の知識が広がるし、考え方も柔軟になるから、いいことだと思っています。今、私にとって「みずえにほんごサークル」は生きるエネルギーになっています。

